奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(4)
―平城宮跡―

About the Tea-related Historical Sites Existing near Nara Saho College Part 4 ―Nara Palace Site―

寺田　孝重
TERADA Takashige

前稿[1)]に続いて，本学近辺の「茶」に関した史跡を紹介する．今回は，茶の事跡として平城宮跡を，また当時の茶に関することを紹介する．

キーワード：平城宮跡，平城遷都 1300 年祭，天平茶
Key Words：Nara Palace Site，Nara the Capital in 1300 Festival，Tenpyo era tea

1. はじめに

本学が位置する奈良市地域は，日本の文化発祥地であり，文化遺跡が多数存在している．その中にあって，特に茶道や茶業に関連した史跡を紹介してきた[1-3)]．今回は，平城京跡で行われた平城遷都 1300 年祭で開催された天平茶会や天平茶の復元を取り上げる．

2. 紹介

2-1 平城宮跡

近鉄奈良線が西大寺駅を出発し，新大宮駅に着くまでの左右に広がる広大な敷地が，日本で最初に建設された本格的都城の「平城宮跡（特別史跡）」である．以前は，大きな石碑と展示館があるだけの草原であったが（図 2），整備がすすみ東院庭園跡（特別名勝）や朱雀門が復元されてきた（図 3）．特に，平成 22（2010）年は，和銅 3（710）年の平城京遷都から 1300 年に当たり，「平城遷都 1300 年祭（以下遷都祭）」[注1)]が県をあげて行われ，大極殿・遣唐使船の復元やたくさんの催しが行われたのは記憶に新しいことと思われる．

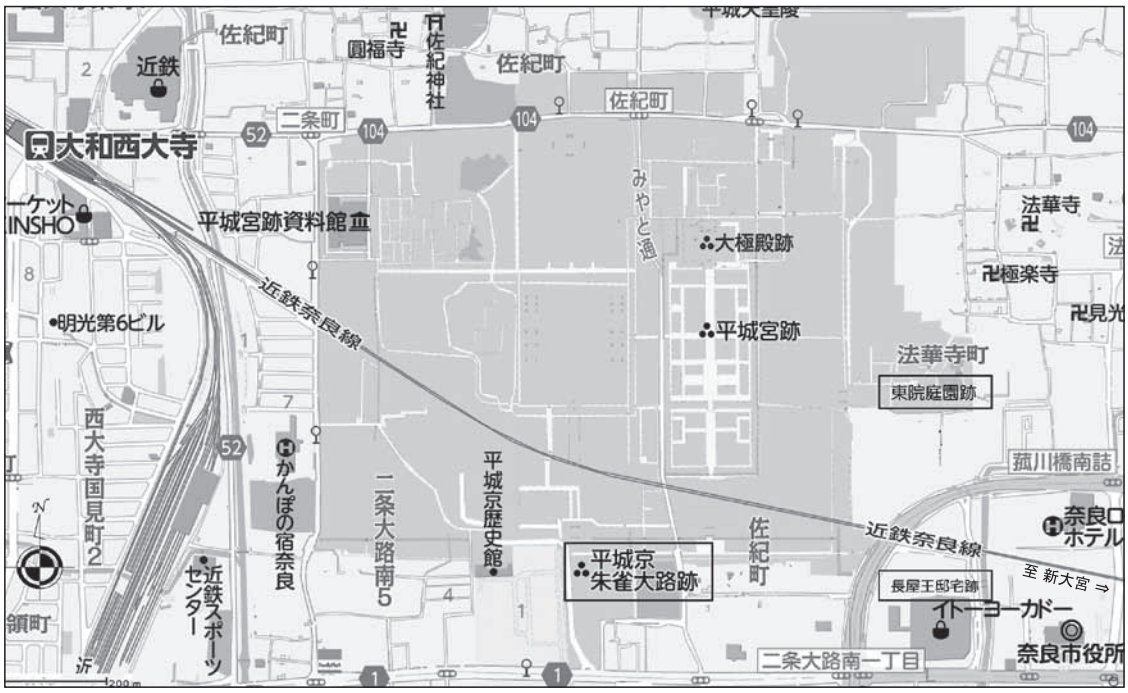


図 1　平城宮跡[4)]

図 2　昭和 40 年代後半の平城宮跡 [5)]

図 3　復原した朱雀門 [6)]

これに先立って 2001 年に設立された平城遷都 1300 年記念事業準備室から，平城京やこれを作った元明天皇[注 2)]，聖武天皇[注 3)] に関係する事柄や催事アイデアの募集が県庁職員全体にあり，当時奈良県農業技術センターの職員であった筆者は,「聖武天皇が行ったと云われる行茶の式[注 4)] 及び天平期の茶」を提案した．それから 10 年近くが経った 2008 年，退職していた筆者のところへ，以前提案したテーマが採用となったとの連絡があり,「天平の茶復元プロジェクトチーム」が編成され筆者がプロジェクトリーダーに任命された．

2-2　天平茶の復元

奈良時代（700 年代）の喫茶について確かな文献は日本にはないが，同時期の中国（唐）には，製造法や飲用法の記載がある有名な『茶経』[注 5)] がある．しかし，どんな品質の茶の葉を使用するか, どのようにして大量のものを用意するか, などは何所にも資料はなく，県の茶業振興センターで試行錯誤するしかなかった．

本番まで，2 年しかなく，初年度の試作品は，味が薄くなり，茶経に記述のある陳皮（乾燥蜜柑皮)やショウガなどを混入すると, 茶の味がそちらに負けてしまうように思われた．他方で若い人に試飲してもらうと，ハーブティのようで悪くないとのアンケート結果も出たが，今回は茶本来の味を出すため，陳皮やショウガの混入は止めることとした．飲用直前の「火入れ」とごく微量の食塩添加を行うことで，食味に関しては合格点を出すところまで行くことができた．さらに，生産ラインのネックになっていた茶のペースト化をミンチ機利用で克服し，県茶業研究センターと生産農家の協力で，量的にも何とか間に合わすことができた(図 4).

遷都祭前年の 2009 年 9 月 26 日に東院庭園跡（図 5）で行われた「東院庭園観月会」（図 6，7）では，NHK ドラマ「大仏開眼」の配役および天平時代衣装の発表やオカリナコンサートなどがあり，文化庁長官の出席もあった．この場で，天平茶会のプレゼンテーションが実施され，筆者も奈良時代大臣級の衣装をまとって出席した．この時，遷都祭での天平茶会の概要を決定し，事前の予行演習を

図 4　天平茶製造　成型の様子

図 5　東院庭園跡 [7)]

図 6　天平茶会　観月会での様子

図 7　天平茶会のポスターセッションの様子

図 8　茶研による茶の粉砕

行った．遷都祭での天平茶会については，国の特別史跡平城宮跡内で火を使う事などの問題点もあったが，東院庭園跡エリアでの開催が文化庁から認められた．東院庭園跡は，飛鳥京[注 6)]に飛鳥京苑池跡が発見されるまで，日本最初の日本式庭園跡とされ，発掘と復元がなされていた場所である．衣裳を含む意匠復元も煎茶道[注 7)]美風流の協力でなされ，

図 9　天平茶会で配布されたリーフレット表面[8)]

遷都祭秋季フェア中の 10 月 9 日（土）～11 月 7 日（日）に茶会を実施し，好評を博すことができた．参加者の前で行われたデモンストレーションでは，丸く固められた「餅茶」を炭であぶり，細かく砕き，その茶葉をさらに篩にかけた後に煮立てて茶碗に注がれた．古代のチーズといわれる「蘇」と柿の和菓子「柿寿賀」とともに表 1，2 で記した手順で入れられた茶が，およそ 7000 人の参加者にふるまわれた．

図 10　天平茶会で配布されたリーフレット中面 [8)]

表１　飲用前の手順

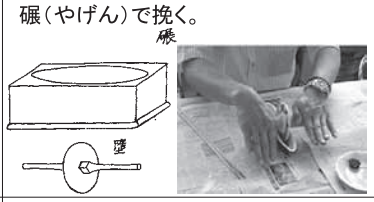
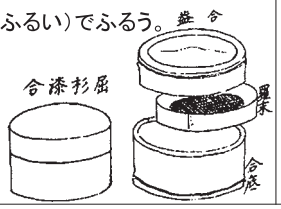
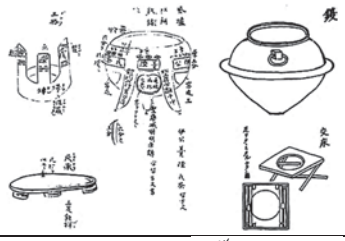
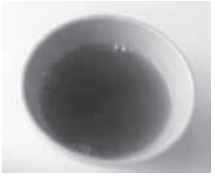
手順NO		茶経	遷都祭・天平茶会
1	火であぶる	①火にかざして両面あぶる。 ②茶の表面がイボ状になるまで、離す、近づけるを繰り返す。 	オーブントースター（余熱あり）で2分あぶる。 ※表・裏ひっくり返して1分ずつ。
2	固形茶を挽く	碾（やげん）で挽く。 	冷めてからミルにかけ粉砕する。（1分）
3	篩にかける	絹の篩（ふるい）でふるう。 	絹の篩（ふるい）でふるう。

表２　茶を入れる手順

手順ＮＯ		茶経	遷都祭・天平茶会
4	湯を沸かす	風炉に炭を入れ鉄製の釜で湯を沸かす。0.6ℓ（120mlの茶碗に5杯分） 	なべでお湯を沸かす。 1.2ℓ
5	1沸 （魚の目のような水疱ができたら…） 塩で味を調える	水の量をあわせて塩で味を調える。 	※塩は固形茶制作時に練り込み済みのため、この過程は省略する。
6	2沸 （水泡が連なったら…） 粉にした茶を入れる	①湯をひしゃくに1杯くみ出す。 ②竹の箸でかきまわす。 ③茶末を量って中心におとす。 	
7	3沸手前 （湯が大きく波たち しぶきが上がったら…） 茶の華（茶に浮かぶ泡）を育てる	①くみ出しておいた湯を加え温度を下げる。 ②茶の華を育てる。	
8	茶碗にくみわける	茶碗に移して飲む。 沫（茶の華の薄いもの）とほつ（茶の華の厚いもの）を均等にくみわける。 	

2-3　天平茶飲用の復元

この茶会の手順を表 1 及び表 2 に示し,『茶経』の手順と比較して紹介してみよう．まず,『茶経』にある，飲用直前に茶を焙る作業が重要となる（表 1 - 手順 1)．これがないと，この団茶[注 8)] は，乾燥状態が良くとも，香りが非常に弱いものになる．次に，これを「茶研」[注 9)] により粉砕し（図 8)，粉末を篩にかける．天平茶会で来場者に試飲してもらう際には，スピードと量の関係もあり会場奥でミルを使って粉砕した（表 1 - 手順 2)．茶の調整が済むと，湯を沸かす作法があり（表 2)，茶の粉末が投入され攪拌の後，各碗へ注がれ客の元へ運ばれてゆく．

『茶経』には湯の沸騰の経過に細かい記述があり，客を意識した配慮が見られるが，本イベントでも来場者の目前で同様の手順をとり，これを追体験することで天平の時代に思いをはせることができたと思われる．

2-4　天平茶とその時代

日本の文献に喫茶についての記述が初めて登場するのは『日本後記』[注 10)] の 815 年の記事である．そこに大僧都永忠が嵯峨天皇に茶を奉ったとある．しかし平城宮跡から「茶三斗五升」[注 11)] という記載のある木簡が出土し，「茶」は「にがな」のこととされてきたが，当時の人にとってニガナとは何だったのか，「茶」を「茶」の類とする[注 12)] ならというロマンあふれるシンポジウムが遷都祭開催中の 2010 年 8 月 21 日（土）に「天平の茶とその時代：聖徳太子は、お茶を飲んだか？」と題して開かれ，著者もパネラーとして参加した．

図 11　天平茶論シンポジウムチラシ裏

シンポジウムでは奥村彪生氏による「万葉人の食生活」と神津朝夫氏による「茶の湯のふるさと奈良」の講演，青山茂氏による基調講演「天平文化と茶」の後パネルディスカッションが行われた．日本には茶樹が昔からあったのか,喫茶はどのようにして始まったかが中国の歴史や伝説を交えて紹介され，聖徳太子（574～622）の時代の政治や生活の様子，中国や朝鮮半島からの外国文化がどのように日本に伝播したかなど議論が繰り広げられ，天平時代に思いをはせた．

3.　おわりに

4 回にわたって，本学近辺にある茶業や茶道に関係する史跡や事蹟を紹介してきた．奈良県下には，ほかにも多くの茶業や茶道に関する史跡や事跡があるので，引き続き紹介していきたい．

注釈

注 1）2010 年に平城京が誕生してから 1300 年を迎えることを記念して，2010 年 4 月 24 日（土）～11 月 7 日（日）までの 198 日間，平城宮跡をメイン会場として奈良県内各地で歴史・文化イベントや各種フォーラムなどが行われた．

注 2）[661～721]第 43 代天皇．在位 707～715 年．天智天皇の第 4 皇女．名は阿閇（あべ）．草壁皇子の妃．文武・元正両天皇の母．文武天皇が若くして亡くなった後に即位．平城京遷都，古事記・風土記の編纂，和同開珎の鋳造などを行った．

注 3）[701～756]第 45 代天皇．在位 724～749 年．文武天皇の第 1 皇子．名は首（おびと）．藤原不比等の娘，光明子を皇后とした．仏教を保護し，東大寺のほかに，諸国に国分寺・国分尼寺を建立．遺品は正倉院御物として現存している．

注 4）天平元（729）年に聖武天皇が宮中に僧侶を呼び読経させた際，2 日目に僧侶にお茶を振る舞ったと，一条兼良の『公事根源（1422 年）』や大典禅師の『茶経詳説（1774 年）』に書かれている．しかし，いずれも後世に記されたものなので実際に行われたかは不明．

注 5）中国の茶書．全 3 巻．陸羽[？～804]著．760 年ごろ成立．茶の起源・製法・いれ方・飲み方・器具などを詳しく述べた最古の茶書．

注 6）古代，明日香地方に置かれた都の総称．允恭（いんぎょう）・顕宗（けんぞう）両朝，および推古朝[593～628]から，孝徳・天智・弘文 3 天皇の時代を除いて，文武朝[697～707]までの都．

注 7）抹茶を味わう茶道に対し煎茶の味を楽しむ茶道のことをいう．独自の道具と作法があり，江戸時代，黄檗宗の僧隠元が始め，売茶翁が広めたとされる．

注 8）中国の固形茶の一つ．茶の葉を蒸して茶臼でついてかたまりにしたもの．削って使用する．形は団子状に丸く固めたものだけでなく多様である．唐代の物は餅茶と呼ばれ少し厚みを持った扁平の物が多い．団茶と呼ばれるようになるのは五代十国時代（907～960 年）から宋の時代（960～1279 年）にかけてである．

注 9）図 8 のように，固形茶を粉末にするための薬研を小型にしたような器具．

注 10）平安時代初期に編纂された勅撰史書．承和 7（840）年に完成し，延暦 11（792）年から 833（天長 10）年に至る 42 年間を記す．全 40 巻であったが散逸し，江戸時代に天文 2（1533）年の写本 10 巻分が三条西家で発見され，初めて出版された．現存分は巻 5・8・12・13（桓武天皇の時代），14・17（平城天皇の時代），20・21・22・24（嵯峨天皇の時代）の 10 巻で，淳和天皇の時代の部分は全く残っていない．

注 11）奈良文化財研究所の「木簡データベース」[9] によると，この木簡は「・園池司進〇／毛付瓜廿顆／蔓菁十把 // 〇／羊蹄二斗／葵二斗 // 〇／荼三斗五升／蘿蔔 六把 // 〇／蓼四升／合七種 // ・右内侍尼卅人供養料＼〇天平八年八月廿日正八位上行令 史日置造『宜』」（◇は木簡の穴，〇は空白，＼は改行，／は割書の始まり，// は割書きの終わり，・はここより木簡裏，『』内は違う人の文字あるいは追記した文字を表す）と記されているという．

注 12）「荼」という字は，元来苦いもの一般を意味しており，普通には「ニガナ（オオドチ）」と読まれ，野菜類と理解されている．しかし，この字は，中国で「茶」という字ができるまでは「茶」のかわりに「荼」を使っていたという事実[注 10] があり，「唐の中ごろ（8 世紀）、荼字から茶字が新しく作られた」[10] といわれている．我が国に「茶」の字が伝わるまでに，どれくらいの時間が必要だったかは不明であるが，わが国でも「荼」を茶の意味で使っていた時期がある可能性もある．

注 13）東洋文庫版『茶経』の訳注者である布目氏は，前漢時代（紀元前 202 年～紀元後 8 年）に王褒が記した『僮約（紀元前 59 年頃）』の一文「武陽買荼」を例にあげ，「武陽買荼」の「荼」が「茶」であると清朝考証学の開祖顧炎武が『日知録（1670 年）』の第 7 巻で初めて主張したと述べている[11]．

引用・参考文献

1）寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(3)西大寺，元興寺，称名寺」，『奈良佐保短期大学研究紀要』，22，pp.37-42（2014）
2）寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(1)」，『奈良佐保短期大学研究紀要』，20，pp. 95-99（2012）
3）寺田孝重：「奈良佐保短期大学の近辺に存在する茶関係の史跡について(2)：岡田亀久郎顕彰碑，松屋，依水園，吉城園，八窓庵」，『奈良佐保短期大学研究紀要』，21，pp.73-82（2013）
4）Yahoo!Japan 地図： http://map.yahoo.co.jp/（2015.11.30）
5）説田晃大：『奈良市の昭和 ：写真アルバム』，樹林舎，p.102（2015）
6）奈良文化財研究所：「平城宮跡資料館朱雀門」，http://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/page/suzaku.html（2015.10.14）
7）奈良文化財研究所：「平城宮　東院庭園[パンフレット]」2 枚目（1998）
8）平城遷都 1300 年記念事業協会：「天平茶會[リーフレット]」，（2010）
9）奈良文化財研究所：「木簡データベース」，http://www.nabunken.go.jp/Open/mokkan/mokkan.html（2015.11.30）
10）布目潮風：『中国名茶紀行（新潮選書）』，新潮社，p.33（1991）
11）布目潮風：『中国名茶紀行（新潮選書）』，新潮社，p.30-33（1991）
12）大山誠一：『長屋王家木簡と奈良朝政治史（古代史研究選書）』，吉川弘文館（1993）
13）寺田孝重：「天平茶再現の試み」，『月刊 茶』，63（9），pp.18-21（2010）
14）林屋辰三郎：『図録茶道史：風流の成立：利休の道統』，淡交社（1980）
15）陸羽著，布目潮風訳注：「茶経」，『中国の茶書（東洋文庫 289）』，平凡社（1976）
16）布目潮風：『中国名茶紀行（新潮選書）』，新潮社（1991）
17）平城遷都 1300 年記念事業協会：『平安遷都 1300 年祭：公式記録』，平城遷都 1300 年記念事業協会（2011）
18）デジタル大辞泉，Japan Knowledge，http://www.jkn21.com/(2015.11.30)
19）日本国語大辞典，Japan Knowledge，http://www.jkn21.com/(2015.11.30)
20）Mapion 都道府県地図，http://www.mapion.co.jp/map/japan.html（2015.11.30）
21）日本茶業中央会監修：『緑茶の事典』改訂 3 版，柴田書店（2005）